



社会言語科学会ニューズレター

The Japanese Association of Sociolinguistic Sciences

第 13 号

2002年8月31日

発行：社会言語科学会事務局

〒214-8580 川崎市多摩区東三田 2-1-1 専修大学文学部永瀬研究室気付

Fax: 044-911-1231 E-mail: thb0308@isc.senshu-u.ac.jp

<http://www01.u-page.so-net.ne.jp/ra2/jnagase/>

《巻頭言》

国際社会言語学にむけて

「社会言語科学」編集委員
桜美林大学大学院国際学研究科
J.V.ネウストブニー

「国際社会言語学」というものはすでにあるのかもしれないが、より明瞭なデザインを求めてもいい時代がきたと思う。現在、ことばのバリエーションの研究は一つの社会の中では熱心に行なわれているものの、ある社会を超えたバリエーションの研究になると、いまだに乏しく統一性がない。むしろ、「借用語」の研究は依然として、出来の悪い学生のための卒論テーマとして残っている。また誕生以来あまり成長しないのは「対照研究」だが、言語類型論は、確かに成長してきている。これに対して、以前全くなかった「第2言語習得理論」や「接触場面」の研究は、間違いなく元氣よく育ってはいいるが、他の分野とのつながりが弱いような気がする。そこで「国際社会言語学」への統一した理論が望まれる。

一方、21世紀の社会言語学の最も将来性のある見通しの一つは、「言語連合」の研究だろう。これは、国際地理言語学とも言えるかもしれないが、その中には従来の方言学にとっても新しい刺激が隠されている可能性がある（『社会言語科学』1/2参照）。「言語連合」はヨーロッパの呼び方で、アメリカでは「言語地域」がこれに当たる。それぞれ20世紀

の初めに日の目を見て以来、構造言語学のうち、ヨーロッパではプラグ学派、アメリカでは記述言語学の中である程度まで理論化されてきた。

言語連合論の対象は、近接する地域において使われている言語だ。というのは、隣接地域で使われる諸言語はかなりの類似性を呈することがあり、例えば、バルカン半島のことば（スラブ語、ルーマニア語、ギリシャ語など）、あるいはインドの諸言語は、歴史的にはいろいろなグループに属しているが、さまざまな特徴を共有するようになった。日本語と朝鮮語、日本語と中国語、日本語とフィリピン諸言語などがどのように類似し、またどのように異なっているかは、これからの研究課題である。

ところで、地域的類似性は、単に隣接地域の言語のみに見られるわけではない。たとえば、ある連合と別の連合の境界線に位置する言語は隣接していても、偶然的とは思えないほど似ることがある。私はかつて、日本語／朝鮮語連合と、インド諸言語連合のことばとが多くの類似性を持っていることを、両連合ともユーラシア連合と中国語連合の接点に置かれているということで説明を試みた。

連合的な類似性が文法能力の分野だけではなく、当然コミュニケーションのプロセス一般に亘るが、これらすべての現象を「国際社会言語学」という広い枠組みの中で再考する必要があるだろう。

2-4 第10回研究大会プログラム

4 社会言語科学の未来を作る会第1回集会のお知らせ

5 学会誌『社会言語科学』

特集号テーマの募集／書評候補の募集／「特集・コミュニケーションの社会言語科学」論文募集のお知らせ

6 第11回研究大会のお知らせ／研究発表の募集／研究大会ワークショップ企画募集のお知らせ

7 研究最前線／博士論文情報／前号の訂正とお詫び

第10回社会言語科学会研究大会プログラム

期日 2002年9月21日(土)・22日(日)

場所 東北大学 川内北キャンパス

〒980-8576 仙台市青葉区川内 http://web.bureau.tohoku.ac.jp/campus_guide/map.html#kawauchi 参照

交通案内 JR 仙台駅前バスプール、のりば9から市バスで約10分「扇坂」下車
〔行き先 3系統：青葉城址循環(青葉通経由) / 宮教大 / 青葉台〕

プログラムの最新情報は学会ホームページに掲載されておりますので、併せてご覧ください。

第1日 9月21日(土) 9:30 受付開始 10:00 開会

10:00-12:00 研究発表/口頭 2会場で同時進行

〔研究発表/口頭 Session 1 : A会場〕

- | | | |
|-------------|---|--------------------------|
| 10:00-10:25 | 母語場面と接触場面における「共同発話文」の比較 | 宇佐美まゆみ・木林理恵
(東京外国語大学) |
| 10:30-10:55 | 遠隔接触場面における日本語学習者の
コミュニケーション・ストラテジー
ー 対面場面との比較から ー | 尹 智鉉 (早稲田大学) |
| 11:00-11:25 | 会話における円滑な人間関係を損ないかねない言語行動
ー 年齢差のある2集団の比較を通して | 高田三枝子 (東京外国語大学) |
| 11:30-11:55 | 日英語の重複発話:
予測可能性からメタコミュニケーションへ | 内田らら (東京工芸大学) |

〔研究発表/口頭 Session 2 : B会場〕

- | | | |
|-------------|--|---------------------------|
| 10:00-10:25 | 東京語アクセントの聞き取りに影響を及ぼす
地元意識・方言意識
ー 小笠原諸島父島の中高生の多変量解析 ー | 阿部 新
(日本学術振興会/東京外国語大学) |
| 10:30-10:55 | 韓国の帰国子女の日本語と韓国語間の
コード・スイッチングの形態 | 郭 銀心 (東京大学) |
| 11:00-11:25 | 談話レベルから見た日本語のフォリナートーク | 辛 銀眞 (東京外国語大学) |
| 11:30-11:55 | オーストラリアの言語政策と経済発展
ー 政策の「効果」を問う ー | 青木麻衣子 (北海道大学) |

12:00-12:30 総会・徳川賞授賞式

12:30-13:30 休憩 (理事・監事は理事会)

13:30-15:00 講演

講演者 山島 重 (東北大学)

15:00-18:00 シンポジウム

〔テーマ〕 日本語方言の社会的地位変動
企画責任者: 井上 史雄 (東京外国語大学)

18:00-20:00 懇親会

第2日 9月22日(日) 9:30 受付開始 10:00 開会

10:00-12:00 研究発表/口頭 2会場で同時進行

〔研究発表/口頭 Session 3 : A会場〕

- | | | |
|-------------|--|------------------|
| 10:00-10:25 | 日韓不快認知構造の比較 | 大塚 徹 (専修大学) |
| 10:30-10:55 | 因子分析による日本語のイメージ形成に関する研究
— 韓米大学生のアンケート調査を中心として — | 梁 敏鎭 (東京外国語大学) |
| 11:00-11:25 | 勧誘表現における日独の傾向 — お茶に誘う場合 | 田中優子 (早稲田大学) |
| 11:30-11:55 | 会話における名前の付加 — 日英対照研究 — | 神谷健一 (四條畷学園高等学校) |

〔研究発表/口頭 Session 4 : B会場〕

- | | | |
|-------------|---|--|
| 10:00-10:25 | 日本語授受表現「テヤル」「テアゲル」に対する
イメージについて — 韓国人学習者と
日本語母語話者とを比較して — | 峯崎知子 (圓光大学校) |
| 10:30-10:55 | 談話における指示副詞「こう」の
インタラクショナルな機能 | 成岡恵子(日本女子大学)・
ヘイズ高野 園
(カーネギーメロン大学) |
| 11:00-11:25 | A Cognitive Account for Subject-Verb Disagreement:
A Case of 'Aren't I?' in English | 香西壮一・南部智史・伴在明子
(関西外国語大学) |
| 11:30-11:55 | シェイクスピア作品における二人称代名詞
— 『ロミオとジュリエット』と『夏の夜の夢』を中心に —
The use of 2nd person pronouns in Shakespear's
"Romeo and Juliet" & "A Midsummer Night's Dream" | 嶋田亜由美・林 由季子・武田咲子
(名古屋女子大学) |
| 12:00-13:00 | 休憩 | |

13:00-15:00 研究発表/ポスターセッション

- | | |
|---|--|
| ○ コードスイッチングに対して認知言語学的アプローチ
が示唆するもの
— バイリンガリズムを包括的に捉える視点から —
崔 春浩 (京都大学) | ○ 韓国語の終結語尾 'ketun' の会話進行機能に関する
— 考察
平 香織 (東北大学) |
| ○ 外国人英語教師/指導助手の仕事とつきあいと使用言語
の関係性
平野圭子 (九州共立大学) | ○ 問い返しによる非優先的連鎖の修復
榎本美香・伝 康晴 (千葉大学) |
| ○ なぜ英語は動作主主語を多用するのか: 聖書「詩編」
における日英語の対照研究
高橋道子 (川村学園女子大学) | ○ 日本語の接触場面会話における他者開始修復
— ポライテネスの観点から —
義永(大平)未央子 (愛知教育大学) |
| ○ You with feeling: Postposed second person terms as
indicators of modal adjustment in spoken Japanese
Lansisalmi Riikka (Laurea Polytechnic) | ○ 会話における発話権の維持
— 日本語母語話者と日本語学習者の実態 —
木暮律子 (名古屋大学) |
| ○ 述語のアスペクト的意味解釈
— 付加詞との関係から —
高橋 幸・茂木和洋 (東北大学) | ○ 日本語における依頼談話の考察
— 韓国人日本語学習者の場合を中心に —
柳 慧政 (学習院大学) |
| ○ 「た」にみられる視点
— テレビニュースの日英語比較から —
難波彩子 (日本女子大学) | ○ 職場における相互理解の談話構造
— 質問・応答・説明・主張を理解するためのコミュ
ニケーション過程の分析 —
杉本明子 (国立国語研究所) |
| ○ サービスコールにおける「名のり」をめぐる一考察
鈴木佳奈 (University of Essex) | ○ 社会的信念支持機構に基づく発話意図推定アルゴリズム
松本斉子 (東京工業大学) |
| | ○ 会話連鎖の組織化過程における聞き手デザインの機能
高梨克也 (通信総合研究所) |

- 会話に見られる聞き手の引き取り
— 認知的予測可能性と規範的正当化可能性という
観点から —
森本郁代 (通信総合研究所)
- あいづちが生起する環境に見られる聞き手の振舞い
野口広彰・片桐恭弘 (ATR メディア情報科学研究所)
- 「ギジュツ」と「ギジツ」: 『日本語話し言葉コーパス』
にもとづく直音化現象の分析
斉藤美紀・小磯花絵・前川喜久雄 (国立国語研究所)
- 話し言葉における撥音化現象の実態
— 『日本語話し言葉コーパス』を用いて —
小磯花絵・斉藤美紀 (国立国語研究所)・間淵洋子 (東
京都立大学)・籠宮隆之・前川喜久雄 (国立国語研究所)
- FTF と CMC におけるコミュニケーション特徴に関す
る研究
笠木理史・大坊郁夫 (大阪大学)
- コミュニケーションチャネルと談話構造
— 音声とジェスチャの分析から
坊殿真弓 (神戸大学)・片桐恭弘 (ATR メディア情報
科学研究所)
- 『銀河鉄道の夜』に表出するオノマトペの英訳手法に
関する研究
— ‘ぼんやり’ の訳出手法の特徴に関する一考察 —
高橋悌子 (東北大学)
- 翻訳と話法のメカニズム
伊原紀子 (神戸大学)
- 山本周五郎作品における言語行動の分析
杉本綾乃 (際コーポレーション)
- 18th Century Movements in the Standardization of
English in Great Britain: Support for a Standard
Scottish English
S.C.R. Markve (神戸市立外国語大学)
- 在香港ネパール人コミュニティの言語生活
西田文信 (香港城市大学)
- ジェンダーと英語学習態度
小林葉子 (米沢女子短期大学)
- 体型・体重が内容となる会話の中でのジェンダー・オ
リエンテーション
福島三穂子 (University of Essex)
- 女性対象メディアにおける「ほめことば」
秋月高太郎 (尚絅女学院短期大学)
- 遂行的発話行為を志向する政治的言説
— 象徴系の小泉「構造改革」
奥田博子 (秋田大学)
- 社会現象としての外国語大学
松田 健 (関西外国語大学)

15:00-18:00 ワークショップ 2会場で同時進行

ワークショップ1

【テーマ】 ヨーロッパから見た「ポライトネス」

企画責任者: 岡本能里子 (東京国際大学)
 話題提供者: 丸井一郎 (高知大学)
 ルドルフ・ライネルト (愛媛大学)
 山下 仁 (大阪大学)
 指定討論者: J.V.ネウストプニー (桜美林大学)

ワークショップ2

【テーマ】 会話分析の可能性 — 「学習」の捉え直し

企画責任者: 西阪 仰 (明治学院大学)
 話題提供者: 高木智世 (慶應義塾大学)
 Scott Saft (筑波大学)
 Dominic Berducci (富山県立大学)
 細田由利 (昭和女子大学)

18:00 閉会

社会言語科学の未来を作る会 第1回集会

あなたは本学会に満足していますか?

この集会は、研究大会・論文誌・講習会の内容や
 学会の運営の仕方など、社会言語科学会の現状に対
 する不満を自由にぶちまけ、本学会の将来に関する
 提案を好き勝手に語る場です。社会言語科学の未来
 をともに作ろう、という意欲のある方ならどなたで
 も参加できます。

参加希望の方は、第10回研究大会初日の懇親会
 後に懇親会場前にお集まりください。

主催: 社会言語科学会企画準備委員会
 委員長 伝康晴 (千葉大学)
 副委員長 田中ゆかり (日本大学)

特集号テーマの募集

学会誌 『社会言語科学』

『社会言語科学』では、特集号を発行しています。これまでに「日本の言語問題」(第2巻第1号)、「日本語と言語接触」(第3巻第1号)、「電子社会の言語科学」(第4巻第1号)の特集が実現し、現在「言語の対人関係機能と敬語」(第5巻第1号の予定)、「コミュニケーションの社会言語科学」(第6巻第1号の予定)の特集が進行中です。よい特集のテーマがありましたら、学会誌編集委員会委員長までご提案ください

学会誌編集委員会委員長 岡 隆 E-mail: oka@l.u-tokyo.ac.jp ("l"は英字のエルです)

書評候補の募集

『社会言語科学』では、毎号2, 3本の書評を掲載してきました。書評欄の一層の充実をはかるために、学会誌編集委員会内に書評担当編集委員をおきました。よい書評候補がありましたら、書評担当編集委員と学会誌編集委員会委員長までご推薦ください。ご推薦には、①書評対象図書名、②書評候補者(会員に限る)、③図書の推薦理由(2, 3行)をお含みくださり、書評担当編集委員と委員長の両方にお送りください。なお、書評の投稿につきましても、従来通り受け付けます。

書評担当編集委員 渋谷 勝己 E-mail: shibuya.katsumi@nifty.ne.jp

学会誌編集委員会委員長 岡 隆 E-mail: oka@l.u-tokyo.ac.jp

特集論文の募集のお知らせ 《11月30日 投稿締切》

学会誌編集委員会では、「コミュニケーションの社会言語科学」の論文を募集しています。特集に投稿された論文は、通常の投稿論文と同じく、査読を経て掲載が決定されます。原稿の種類、原稿の書き方、投稿のしかた、投稿先などは、通常の論文の場合と同じです。投稿に際し、「特集」のための論文であることを明記してください。

論文投稿の締切: 2002年11月30日(土)

掲載号の発行: 2003年7月(第6巻第1号に掲載予定)

お問合せ先: 学会誌編集委員会委員長・岡 隆

E-mail: oka@l.u-tokyo.ac.jp

〒113-0033 文京区本郷7-3-1

Fax: 03-3815-6673

東京大学文学部社会心理学研究室

特集・コミュニケーションの社会言語科学

社会言語科学会は、人間相互のコミュニケーションあるいは言語の機能を特に重視したトランスディシプリナリーな学会として、1998年1月24日に創立された。学会誌創刊号の巻頭言にある、5周年を迎え、ここに、コミュニケーションそのものをテーマとした特集を組みたい。

コミュニケーションは、いうまでもなく相互的な行為である。ここ百年ほどの近代言語学の歩みをふりかえると、言語は、理想的な一人の話者が有する抽象的な体系として捉えられてきた。こうした言語観が、豊かな価値ある知見を生み出してきたことはまぎれもない事実である。しかしながら、われわれはいま、パラダイムの転換を迫られている。

異質な他者との相互作用の中で、変化しながら、実時間とともに進展するコミュニケーション。この動態をあやまりなく正確に捉えるモデルが、学問として求められているのである。その姿は、言語のしくみとして解明される必要があるとともに、言語それだけに閉じたものではない。コミュニケーションとは、人間が、相互に行うものである。とすれば、ことばを超えた、人自体の営みとして、個人と社会の両面に考慮しつつ、包括的にこれを捉える視点がなければならない。社会言語科学会が、トランスディシプリナリーな学会としての性格を有するのは、必然的な要請の結果なのである。

特集は、総論と、各論、および応用論の三部から構成したい。

総論は、それぞれの学問的発想からコミュニケーションを捉えなおし、位置づけ、今後の展望を示す論を募集する。総論は、理論的な整理を主として行う研究であってよい。たとえば、「社会心理学からみたコミュニケーション研究」といったようなもの。

各論は、個別の事象を、コミュニケーションという観点から記述あるいは再考する、実証的な研究を募集する。説明にまで及んでいなくても、良質な記述に成功していることを大切にしたい。

応用論は、コミュニケーションの観点から、今日の現実的な課題を整理し、その解決を模索する、具体的な事例を含んだ論を募集する。言語教育や情報処理はもちろんのこと、気がつきにくい問題点を指摘する論も歓迎する。たとえ少ない事例であってもかまわない。課題との関係が具体的かつ説得的に示されていることが重要である。

どの部門に関しても、コミュニケーションという観点から各自が問題そのものを発見し、魅力的な題を提示し、論を展開していただくことを望んでいる。テーマがコミュニケーションに関係したものであれば、題には「コミュニケーション」という術語を含まなくてよい。希望部門の記入は、あればよいがなくてもよい。最終的な配置はおまかせいただきたい。

多様な経験を持つ会員の、多様なディシプリンから発想された、多様な切り口の論が並び、結果として現代のコミュニケーション研究の現状と課題が総合的に浮かび上がるような特集号になることを願っている。会員の皆様のご努力とご協力をあおぐものである。

(イシューエディタ: 沖 裕子)

第11回研究大会は以下の予定で行われます

期日 2003年3月8日(土)・9日(日)

場所 立教大学池袋キャンパス

所在 〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1 (http://www.rikkyo.ne.jp/~koho/univ_data/accessmap/index.html 参照)

交通 JR 山手線・埼京線・高崎線・東北本線、東武東上線、西武池袋線、地下鉄丸ノ内線・有楽町線
「池袋駅」下車 西口より徒歩約7分

研究発表の募集

第11回大会の研究発表を以下の要領で募集します

発表種別には、口頭発表とポスター発表を設けました。ポスター発表は会員同士が直に議論や情報を交わすことのできる発表形態です。奮ってご応募をお願いします。

【発表資格】 申込の時点で社会言語科学会の会員であること(申込と同時に入会も可。連名発表の場合、筆頭発表者・口頭発表者は本学会員である必要があります)。

【発表内容】 本学会の趣旨に沿った分野の内容で未発表のもの。(社会言語学、社会心理学、社会学、心理学、コミュニケーション論、言語学、言語人類学、文化人類学、語用論、日本語教育、英語教育、情報科学、認知科学、人工知能、その他の分野で、ことばを社会や文化・認知との関係でとらえた研究)

【発表形態】 (1)口頭発表(質疑応答を含め25分程度の発表時間を予定)、(2)ポスター発表(ポスター数件を集めてポスターセッションを構成します。発表者と聴衆が直接議論することができます。)

【応募要領】 (1)発表題目、(2)氏名、(3)住所、(4)連絡先電話/Fax 番号、(5)E-mail アドレス、(6)所属、(7)職名、(8)希望発表形態(口頭/ポスター)、(9)発表要旨 1,200 字程度を記載した E-mail を下記アドレスに送付してください。

なお、E-mail での応募を原則としますが、郵送でも受け付けます。その場合、上記(1)~(9)の項目をなるべく A4 用紙 1 枚に収めるようご記載ください。※要旨の言語は日本語を原則としますが、英語でも受け付けます。

※E-mail の添付書類はできるだけ避け、通常のテキストでお送りください。

【応募先】 jass-submission@mic.atr.co.jp

〒180-0001 東京都武蔵野市吉祥寺北町 4-1-27-208

社会言語科学会研究大会委員会 阿部圭子

Fax: 0422-55-5759

【申込締切】 2002年11月15日(金)

【予稿集】 採否の結果は12月15日までに応募者に連絡します。

発表者には(口頭発表、ポスター発表とも)、発表に先だって予稿集用の原稿の執筆をお願いします。A4 サイズで6ページ以内、締切期限は2003年1月15日の予定です。

なお、応募の採否、発表順序などについては研究大会委員会にご一任願います。発表形態(口頭あるいはポスター)についても応募時の希望に沿えない場合もありますので予めご了承ください。

※第10回大会では、50件の発表応募があり、そのうち47件を採択させていただきました。

研究大会ワークショップ企画募集のお知らせ

研究大会では、研究発表、大会企画として招待講演、シンポジウムに加えて、会員の企画に基づくワークショップを開催してきました。特定のテーマを設定して、研究課題の整理・発掘、新たな研究方向の提示、異分野間の認識の擦り合わせを目標として集中的に討論を行います。学会会員であればどなたでも企画いただけます。研究大会における会員間の交流を促進し、大会を一層実りあるものとするための場としてご利用ください。

上記趣旨により、ワークショップの企画を広く会員のみならず募集いたします。企画提案者は以下の項目を添えて E-mail にて下記までお申し込みください。

【提案項目】

(1) ワークショップ題目

(2) 企画責任者の氏名、所属、連絡先

(3) 他のワークショップ参加予定者の氏名、所属

(4) ワークショップの企画概要(1,000字以内)

【送付先】 jass-workshop@mic.atr.co.jp

〒619-0288 けいはんな学研都市 光台 2-2-2

ATR メディア情報科学研究所 片桐恭弘

Fax: 0774-95-1408

【申込締切】 2002年11月15日(金)

○ワークショップは大会期間中に研究発表とは独立に1企画あたり3時間程度での開催を予定しています。ワークショップ並列開催の可能性はありますが、研究発表とは重ならないよう設定する予定です。

○会場準備の都合上、申し込み多数の場合には、すべての開催希望に添えない場合もあります。ご了承ください。

研究最前線

「うそ」から探る人間の「真実」の姿

文京学院大学人間学部
村井潤一郎

「うそと秘密は、人間にとってとても大切なんですよ」とある心療内科医の言葉である。大学院修士課程(教育心理学)に進学して間もない私は、「心身医学」という演習を受講していた。担当の先生は心療内科医、冒頭の言葉は、その先生のものである。おそらくは何気ないその一言が、その後の私の研究を方向付けることになる。

「修士論文では、うそについて研究してみよう」と思い立った当時の私は、さっそく「うそ」に関する心理学的研究を調べ始める。その過程で、まず、日本の研究がほとんどないのに対し、欧米の研究はとて多いことが判明する。こうしたアンバランスは、他の分野にも当てはまることとは思いますが、こと「うそ」に関して言えば、「うそ」に対する許容度の文化差が関連していると思われる。

「うそ」に関する心理学的研究は、生理心理学、発達心理学、社会心理学の大きく三つに分類できる。生理心理学では、ポリグラフ(いわゆる「うそ発見器」)に関する研究が有名であり、末梢神経系から中枢神経系へと発展しつつ、我が国では、警察関係者を中心に活発な研究が進められている。発達心理学では、主として子どもの「うそ」に関する研究がなされ、古くはピアジェによる論考が有名であるが、80年代以降の「心の理論」研究の流れで、知見の蓄積が進んでいると思われる。社会心理学では、特に非言語的行動に焦点を当てた「うそ」研究が進められてきた。社会言語科学に最も大きな関わりがあるのが、この社会心理学における「うそ」研究である。

社会心理学における「うそ」研究と言えば、非言語的行動に関するものが圧倒的多数であると言っても過言でない。あくまで傍流に過ぎなかった言語が、陽の目を見たのは比較的最近のことである。この分

野に先鞭を付けたのは、90年代初頭に提唱された情報操作理論であろう。この理論、グライスの提唱した会話の格率を逸脱した場合に欺瞞性の認知(うそっぽさの認知)が生ずる、というものであるが、これは、米国での検討の後、香港、日本など他国でも検討されている。簡単に言えば、格率を逸脱しないメッセージを評定する群と、格率を逸脱したメッセージを評定する群、を設けて、その二群の「うそっぽさ」の評定値を比較するなどして、逸脱の効果についての実験的検討が可能となる。情報操作理論は、シンプルながら(シンプルであるがゆえに)、説得力があると思う。この種の研究は、方法論的には心理学に強みがあるかもしれないが、テーマ的にはむしろ言語学の方に親和性が高いだろう。とりわけ、語用論は関連が深いと思われる。また、心理学では、その実験的な厳密性を優先させた場合、どうしても自然な発話を扱いにくい、そうした発話を扱うことについては、言語学は優位に立つであろう。心理学と言語学がタッグを組み、それぞれが得意とする手法を持ち寄ることで、「うそ」研究はさらなる進展をみせるはずである。その舞台こそが社会言語科学会であろう。

精神的な病に関する研究が人間の心の真実について教えてくれるように、人間のコミュニケーションの真実は、「裏側」たる「うそ」こそが明らかにしてくれるのである。裏から攻める、その一見ひねくれ者のスタンスこそが、求められていると思う。

近年、日本では、政治、食品、・・・に関する諸事件などで、「うそ」に関する許容度が厳しくなっているように思われる。そうした意味で、「うそ」という視点は時流に乗ったものであるが、何一過性のテーマというわけではない。「うそ」という切り口は、いつでも、人間科学において最前線となりうるものだと思う。にもかかわらず専門家は数少ないのが現状である。共同研究者、募集である。タッグを組みましょう。

博士論文情報 (2002年5月18日～2002年8月9日受付分)

○Stuttering in Discourse: Interactional Management of Stuttering Moments and Identity

Yoshikazu Charlie Watanabe Ph.D (Speech and Hearing Science) 2001年5月

博士号授与機関: Department of Speech Pathology and Audiology, The University of Iowa, USA

○本学会の趣旨に沿った分野の内容で書かれた、2001年度の博士論文一覧を、順次、ニュースレターに掲載する予定です。(1)論文タイトル、(2)著者名、(3)博士号授与機関、(4)取得年月、(5)博士号の専攻分野の情報を下記までお送りください。要旨・抄録は掲載いたしませんのでご了承ください。

社会言語科学会事業委員会 jassjigy@cf6.so-net.ne.jp

訂正とお詫び

ニュースレター第12号に誤りがありました。訂正してお詫び申し上げます。(学会事業委員会)

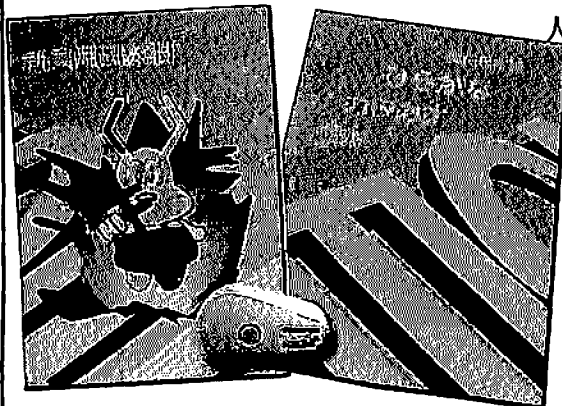
2ページ: 博士論文一覧 木村護郎クリストフ

誤 2001年3月

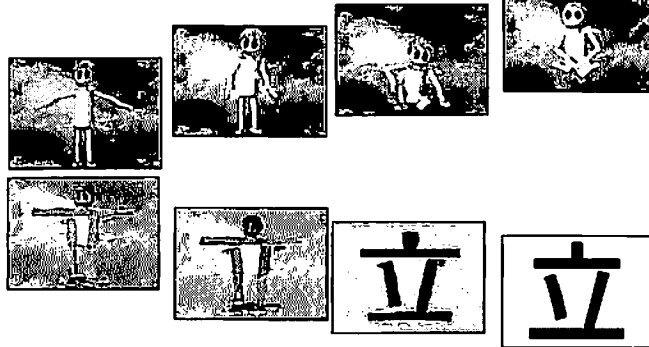
正 2002年3月

IT 中心の日本語教育は、今、圧倒的に面白い

教科書をなぞるだけで声が出たり、



人形が立ち上がって漢字になったり、



これじゃ、誰でも日本語を勉強したくなるよね。



学校法人江副学園

時代に合った教材を、時代に合わせて開発中！

新宿日本語学校

169-0075 東京都新宿区高田馬場 2-9-7

03-5273-0044 URL <http://www.sng.ac.jp>



私達が抱える外国人の日本語学習者の方がIT環境に慣れている例が多くなって久しいですが、その彼等を驚かせる技術と内容がなければこれからの日本語教育も立ちいかないでしょう。私達はそれだけの自覚と覚悟をもって日本語教育に取り組んでいます。

優れた意思決定をサポートするパワフルな分析ツール

「SPSS 11.0J for Windows」

NEW!

優れたデータ管理、分析レポートとモデリング。貴方の研究に大いにご活用ください！

再構成ウィザード

SPSSを使用して分析を進める際、最も時間がかかるのはデータ加工ではないでしょうか。分析の対象としたいデータがSPSSの分析に適応した形式となっていない場合のデータ加工をサポートする「再構成ウィザード」がSPSS11.0より追加されます。

比率分析

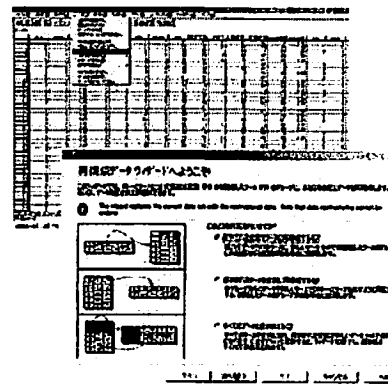
新しい比率分析は徹らばりの係数、変動係数、価格に関連する差異、および平均絶対偏差を含む2つのスケール変数の比率を描写する要約統計量のリストを備えました。

線形複合モデル

入れ子のデータ構造をもっている場合、新しい機能によって予測モデルを構築することができます。固定効果ANOVAモデル、無作為化完備ブロックデザイン、分割法デザイン、純粋変数効果モデル、変量係数モデル、多重レベル分析、無条件線形成長モデル、人レベルの共変量による線形成長モデル、反復測定(経時的変化)分析、および時間依存の共変量による反復測定分析を含むさまざまなモデルを公式化することができます。さらに被験者間で観測数が異なるような不完備反復測定デザインも行うこともできます。Advanced Models オプションで使用可能です。

パフォーマンスの強化

一般線形モデル、近接、階層クラス分析(Base システム)、および多項ロジスティック回帰(Regression Models)が以前のバージョンよりパフォーマンスが向上しました。



<教育機関に携わる皆様へ>

授業で SPSS をお使いの先生方に様々なアカデミックパッケージをご用意しております。

- ・ サイトライセンス契約～教室など複数台でご利用になる場合
- ・ ☆ 学部、大学全体での大規模導入に最適な「無制限ライセンス」もご用意しています。
- ・ Graduate Pack～学生の自習用に…学生専用廉価版特別パッケージ

詳細につきましては下記までお問い合わせ下さい。

SPSS

エス・ピー・エス・エス株式会社 〒150-0012 東京都渋谷区広尾 1-1-39 恵比寿プライムスクエアタワー 10F
Tel:03-5466-5511(代) Fax:03-5466-5621 e-mail:jpsales@spss.com URL <http://www.spss.co.jp>